

そのころは、物売りの声が一日の時の経過を区切った。最近の物売りは、声で町をよごしている。小型トランクに音質の悪いラウドスピーカーをつけ、テープをまわしたりして口上を言わせている。駅のアナウンスも同じくひどい音だ。スピーカーの雑音度を高くして、まわりの騒音に対抗させるのは理に叶っているが、増幅された騒音は人々に被害がおよぶ。

私の子供のころの笹塚は、そうでなかつた。それぞれの音程と節まわし、それに楽器

も加えて、何屋さんが来たのが、すぐわかつた。

納豆屋さんと豆腐屋さん

は、朝が早かつた。豆腐屋さんは平桶に水を張つ

て豆腐を浮かせ、天秤棒

でかつぎ、トーフイという声ばかりでなくラッパを吹く。魚屋さんも平桶に天秤棒を通した。声をかけると、路端に桶をおろして厚い俎板をのせ、分厚い出刃包丁を使った。そのときは、トンと音がした。豆腐屋さんのほうは、桶の水の中から手品のように素早く豆腐をすくいあげ、真鑄色の薄い包丁を使って、

ほとんど掌の上で手品のように音もなく切つて、差し出された皿にすべりこませた。

金魚屋さんも桶をかついで来た。ガラスの小さな金魚鉢を支え木にぶらさげていた。大人は涼しげだと言つたが、子供には祭りの気分への連想があつた。もしかしたら風鈴もぶらさげていたのかもしれない。音の気分は憶えているが、風鈴のことは憶い出せない。

## 物 売 り と 胡 弓 大 宮 真 琴

隠居の祖父が田舎から出て来て滞在しているときには、烟管の羅通し屋が来たのを教えるのは私の仕事だった。

蒸氣でラオを掃除するのである。烟管屋さん（と子供たちは言つた）が来たことは、蒸氣のピーという音でわかつた。パイプに何が取り付けてあつたのかは知らないが、上の上のドより高い音がした。すっかり掃除がすむと、祖父はうますますに烟管をぶかし、火の玉を左の掌の上でころがしながら、次の一服を詰めかえた。

祖父は、よく私をつれて町を歩いた。笹塚の駅前に活動写真館があり、そこがコースだった。広島県沼隈郡赤坂村の水守り

で村委会長だった祖父にとって、そこが都会のイメージを実感させる場所だったのであろう。小坊主の私にも、そこはお目見ての場所だった。丸太を組んだ櫓の上には、楽隊がいた。クラリネットとトランペット、それに三味線のトリオで、うまくするとヴァイオリンもいた。

クラリネット・トリオは櫓の上にいたが、胡弓弾きは路端に蕭を敷いて坐っていた。胡弓弾を見つけて、ランドセルを取り出してそこに坐りこんだのだから、私は小学校に入ったばかりだつたかもしない。尺八は虚無僧で知っていた。女の子は深編笠をこわがつたが、私は平気だった。首を前後に振りながら尺八を吹く虚無僧のあとをつけて、路地から路地へとわたり、五厘玉よりお米を貰うことのほうが多いことも知っていた。

だが、胡弓はまったく新鮮な楽器であった。弦は一本しか張つてなくて、その二本の弦の間に弓の弦がさし込まれていた。どのように弦が動くのか、まん前に坐つて瞳をこらした。

それは絶妙な動きかたをした。気取つていっぽうへゆくかと思うと、ソソと貴婦人のように弓が返つてくる。その瞬間、楽器のほうも、カクと動いて、氣取りにアクセトが添えられる。

しかし、その音は、弓と楽器との呼吸が合つた上流社会の気取りとは、およそかけはなれていた。ほとんど倍音ばかりのようを感じられた。かといって、胴にふくらみがあり、たくさん共鳴弦が張つてあるバリトンの甘さは全くなかつた。甘い、のでもなければ、物恋しい、のでもない。音の情緒は全くちがつていた。或る種の不確かさのなかに、奇妙にリアリスティックな響きがあつた。

のちになつて音楽辞典を見たことがあつたが、二弦の胡弓のことは書いてなかつたし、弓を弦のあいだにはさみこむことも書いてない。その記憶が鮮明に蘇つたのは、徳丸吉彦君が苦労して予算を貰い、胡弓を東南アジア旅行から持ち帰つたときのことである。彼が見せてくれた楽器は二弦だし、弓は弦の間に組みこまれていた。ただ、音の感じだけがちがつて、彼が弾いてくれた音は、楽器の音だった。しかし私が半世紀以上前に聴いたのは、似ていたが異つていた。西の空が赤く染まり、どんな音でも聴きわけることができた笙塚の町の、夕飼どきのざわめきと奇妙に調和した音だった。